



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第18号

平成10年2月16日 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印 刷



21世紀に飛躍する農林業

農学生命科学部同窓会会長 油川 孝 男

この度、中尾良仁氏の後を受けて、同窓会会長を引き受けることになりました油川です。昭和37年に弘前大学の農学部農業経済コースを卒業して県庁に勤務し、現在、諸先輩の皆様方のご指導のもとで、平成9年4月1日から青森県の農林部長を勤めさせていただいています。

学生時代には、故宮下利三教授、今河英雄助教授のもとで、流通学、経済学、経営学を学びましたが、あまり勉強せず教授陣を悩ませた記憶が今でも心に残っております。学生運動が地方大学にも及んできた時代でありましたが、私はバドミントンに集中して女子校や短大のコーチなどに情熱を傾けていました。



リンゴの新品種「こうこう」(写真提供：塩崎雄之輔氏)

(付属農場の塩崎雄之輔助教授(昭和41年園芸卒)により母品種を弘大1号、父品種をふじとして育成され、平成8年に品種登録が出願された。)

県庁に入ってから野球にとりつかれ、現
在もシニアチームの一員として熟年野球を楽
しんでいます。

さて、最近における社会情勢については、
地球温暖化問題に対応していくための炭酸ガ
ス等の削減を決める国際会議など世界的な課
題についての検討がはじまっている一方で、
国内では、財政構造改革法の成立や省庁再編
を内容とする行政改革の最終報告が行われて
いるさなか、日本版ビックバンを間近かに控
えて、証券会社や銀行が倒産しています。

また、農林業をとりまく情勢については、
ウルグアイ・ラウンド農業合意を背景にした
輸入農産物の増加や昭和36年に制定された我
が国農業の憲法でもある農業基本法の見直し
への検討、新たな米政策の展開などその環境
は著しく変化しています。

このような中で、職務である青森県の農林
業の発展を図る立場でものを考えると、国内
の狭い範囲だけでなく、アメリカ、ヨーロッ
パ、ロシア、東南アジアなどをはじめとする
世界の動きも視野にいれて、プラス志向の柔
軟な発想をもって、本県の基幹産業である農
林水産業を基礎にすえ、しっかりとした土台
のうえに創意工夫を凝らした「ゆとり」と
「うるおい」のあるみどり豊かな地域社会を
築いていくという姿勢がいま最も大切である
と考えています。

このため、本県農林業では、生産や販売の
ノウハウや食品産業の発展とこれを支える人
材などの蓄積を活かして、農林業自体の基礎
体力をアップしながら、関連産業とも一体的
となって振興していくとともに、これらを軸
に総合力と創造性を発揮して、これからの青
森県を支える産業を興していくという意気込
みを強くもっていくことが大切です。

県内では、農産物や木材の生産販売だけに
止まることなく、全国でも最も多いと思われ
る農林水産物の加工や農林水産物直売所での
販売活動などが盛んになってきている一方で、
農山村に根ざした伝統的な祭りや新しいイベ
ント、観光農園、農林水産業の作業体験、民
宿経営、農協による食材宅配や在宅介護の活
動など農林業と農山村の多面的な機能を観光
などと結びつけたり、福祉や学校教育と連携
した取り組みが少しずつ始まってきています。

これからの農林行政については、農林業は
人々の生命や豊かな生活を維持していく産業
であり、本県は全国有数の食料供給力をもっ
ているという自信をもって、夏季冷涼な気候、
水・空気の自然条件など恵まれた立地特性と
野菜産地の北への移動なども味方につけ、農
林産物の生産と販売の両面にわたる産地体制
を強化するとともに、産地の有利性を最大限
に発揮しながら所得向上の工夫ができる農林
産物加工のレベルアップや直売活動の拡大な
どを進め、世界の食料不足にも貢献できる農
林業県をめざしていくことにしています。

さらには、農林業と関連産業との連関効果
や環境保全などの公益的な機能を正しく評価
し、食品関連産業などと広く連携をとりなが
ら、県経済全体の発展に多いに役立っていく
ことや、農山村の多面的な機能を発揮して観
光産業や福祉対策などと結びつけた起業化な
どにも努めていくことにしています。

以上のような取り組みを促進して、農林業
が21世紀に飛躍していくためには、地元弘前
大学農学部（現在の農学生命科学部）の果た
す役割も大きく、その取り組みに期待をして
いるところです。現に、農学部の多くの卒業
生が青森県庁をはじめ農業団体や経済界で広
く活躍しておりますし、全国的にもそれぞれ

の立場で活躍されております。

どうか大学においては、今後とも農林業に関する研究などを促進し、県勢発展のために積極的に提言をいただきたいと願っているところであり、本県には、米、りんご、畜産、野菜、花き、林業の各経営部門など他県に例を見ないほどのケーススターディーが存在して研究テーマには事欠かないことを理解し、大いに生産現場に踏み込んで実践教育を通じ

た優れた人材育成に努めていただきたいと思います。

このためにも行政と大学が多くのお機会をもらえて相互に連携を深めたいと考えています。

最後になりましたが、微力ではありますが会長として同窓会というマウンドに立って、コントロールのよいピッチングに努めて参りますので、会員の皆様方にはどうかよろしくお祈りいたします。



会長職を辞すにあたって

農学部同窓会前会長 中尾良仁

昨年11月30日、豊川農学生命科学部部長のご出席をいただき開催された、平成9、10年度同窓会総会において、新会長に満場一致で、青森県の農林部長であります油川さんが推挙されました。

農学生命科学部のスタートと時をいつにして、新しい会長が誕生したこと大変おめでたく学部、同窓会のますますの発展を祈念するものであります。

私も新しい会長にバトンを渡すことができ、責任の一端を果たすことができたと思っております。3期6年間、会員皆様のご協力に深く感謝いたします。

また、同総会において事業計画が承認されましたが、諸物価の高騰や、母校援助費の増額などのため会費の値上げを余儀なくされ、五千円(2カ年分)に決まりました。何かと出費たんのおりではありますが、同窓会活動充実のため、会員のご協力をお願いいたします。

会長在職中いくつかの大きなことがありました。

その一つは弘前大学農学部創設40周年記念

事業があげられます。約4000人の同窓生が巣立ち県内外の各方面で活躍されておりますが、これも40年の歴史が大きな支えになっております。まもなく21世紀ですが、当同窓会も50周年迎えることとなります。2015年には、世界の人口が71億に達するといわれており、地下資源の減少、地球の温暖化などによる環境破壊の危機を抱えながら、多くの国々における慢性的な食糧不足が心配されております。

21世紀は、まさに農学がその解決に大きな責任と役割を担うことになるのではないのでしょうか。50周年には、これら問題解決のための新たな探求が見られることを期待したいと思います。

その二つ目は弘前大学の改革に伴う農学部の名称問題であります。

経過についての詳細はいまさら申しあげませんが、農学研究の重要性に対する認識と、農学部という名前への愛着が、多くの同窓生をして農学部の名前を残すための運動に参加させる大きな原動力になったと思っております。

農学生命科学部が、学部創設の理念のもと

に研究の充実を図り、21世紀が抱える農業とそれに付随するいくつかの課題解決に大きく貢献するとともに、豊かな心をもつ人材の育成に力を発揮されるようご期待申し上げます。

なお、農学生命科学部の誕生を契機に当同窓会の名称も、総会の同意を受けて農学生命科学部同窓会に改称し、新生学部と一緒に歩むことになりました。

同窓生の皆さんには油川新会長のもとで同

窓会発展のためご協力いただくようお願いいたします。

最後になりましたが、このたび弘前大学が50周年を迎えるに当たり後援会を組織し、教育並びに学術研究の充実と国際交流の推進を図るための記念事業を計画しております。すでに趣意書はお手元に届いていると思いますが、なにとぞこの趣旨に賛同し募金にご協力いただきますようお願い申し上げます。



農学生命科学部を未来に向けて

農学生命科学部長 豊川好司

農学部は平成6年10月7日に創立40周年記念を行いました。この度10月1日から農学部創立以来41年にして学部名を改称し、新たに、日本ではじめての学部名、農学生命科学部でスタート致しました。

農学生命科学部に改称するに至った経緯については、同窓生の皆さんには大体お聞き及びのことと思います。全国国立大学の教養部廃止の国策が専門学部の改革へ波及して、教養部や他の専門学部の教員の各分野への再配置に至りました。

弘前大学においては、地元の長年の願いであった工学系学部創設の大きなうねりの中で、その波が農学部再改革へと波及致しました。農学部の改革は弘前大学の教員配置の結果、教養部から理系の教員を主体として8名配置されました。そして理学部生物学科全員13名移りました。さらに純増定員として教授、助教授、助手が各1名つけられ農学部の51名と合わせて総勢75名となりました。学生数は135名から198名と増加致しました。

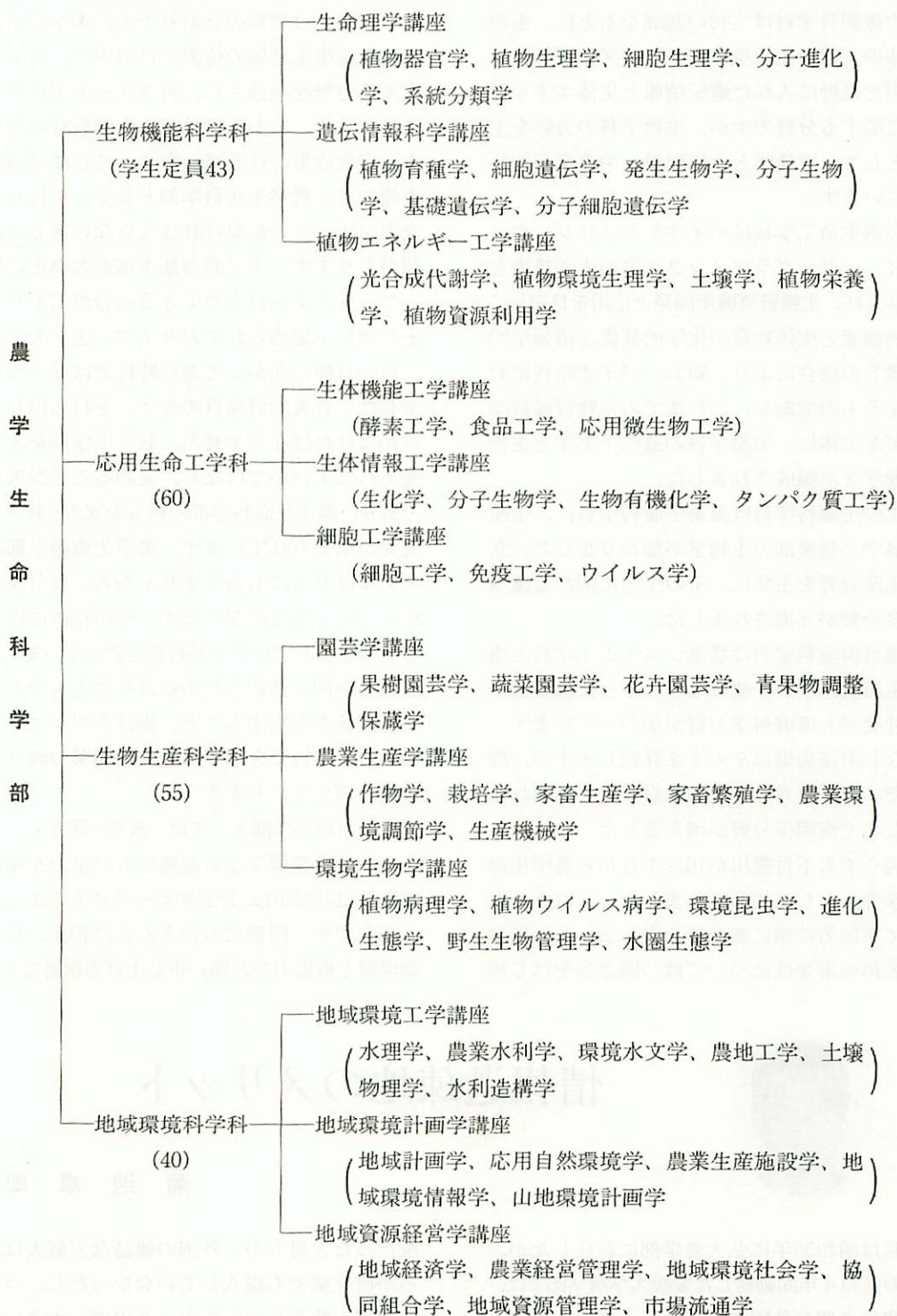
弘前大学農学部は国立大学の中で、香川と

佐賀と同じく最も後発で創設され、最も小さな農学部でしたが、今回の改革によって規模の上では中位の大きさになりました。

発足体制について簡単にお知らせ致しますが、農学分野へ教養部と理学部生物学科の皆さんが移行するに当っては、新学部構想の理念をはじめ、学科の編成などを話し合う過程で、大変困難な葛藤が続いた後の英断の結果の収拾であったと思っています。基礎分野の人たちが、応用分野の学部に参加せざるを得ない心情を思うと、仮に自分がその立場であったらと思うと、何と表現すればよいのか分からない気になります。

共にやっていく、いける態勢作りが求められていると思っています。

同窓生の皆さんには、農学部の変化を詳しく知りたい方も多いと思いますが、紙面に限りがありますので、学科と講座、教育研究分野をフローチャートで表しました。農学部卒業の皆さんですから、内容を大体お分り頂けるとおもいます。



教育研究の編成の特徴を概略説明しますと、生物機能科学科は生物の基礎をもとに、生物個体の多様な生命現象のメカニズムを探り、応用を視野に入れた遺伝情報と生体エネルギーに関する分野ですが、生物学科の分野を主体として、育種学と土壌肥料、栄養学が加わっています。

応用生命工学科はバイオテクノロジーやコンピューターグラフィックス等の先端技術を取り入れ、生物資源機能開発と応用を目指し、生物機能と生体物質の化学的基礎と情報学的基礎との融合により、新しいバイオ時代に対応するものであり、これまでの生物資源科学分野を主体に、生物学科の遺伝子工学と生物生理学とが編成されました。

生物生産科学科は農業生産科学科に、生産機械学と教養部の生物学が加わりました。食糧生産分野を主体に、その生産に関わる環境保全分野が充実されました。

地域環境科学科は農業システム工学科と農業生産流通学が一緒になり、さらに教養部から社会学と環境科学分野が加わっています。

なお附属農場はそのまま存続しますが、理学部の深浦臨界実習所の施設が組み込まれましたので海関係分野が増えました。

図らずも不肖豊川が10月1日から農学生命科学部長として任命されました。国は弘前大学に学部名の頭に農の字を残しました。農学の名称の重要性については、同窓会をはじめ

青森県地域の農林水産業関係者の強い要請もあったことは周知のとおりです。本学部が日本の食糧生産地域の位置づけの中で、農学を支える分野を増強され、再スタートすることになります。しかし21世紀の大学教育の在り方、研究成果の社会還元方法、さらには国際交流など、農学生命科学部として、これらの充実を図っていかねばならない多くの課題があります。大学教育基本法の大綱化に伴って、各大学が自力でできる部分が広がり、その強化が求められています。国立大学が一色の目標に向かって進む時代ではなくなりました。各大学が独自のカラーを打ち出していかねばなりません。私共の学部をどう変えればよいかではなく、変わることが重要であり、農学生命科学部の将来を支える教育・研究が求められています。農学生命科学部のモデルはどこにもありませんから、自分達で作っていくこととなります。そのためにはかなり大きなエネルギーが必要と思っています。これらを押し進めるためには社会と大学との互惠関係を充実すること、掛け声だけに終らせない、実行できる予算の支援態勢の確立が重要と考えております。

農学生命科学部としては、教育・研究の活力を十二分に発揮できる態勢作りに全力を挙げて取り組みながら、社会のニーズにも応えていく所存です。同窓会の皆さんには相変わらず御理解と御協力をお願い申し上げる次第です。



情報過疎地のメリット

菊池卓郎

私は昭和35年に弘大農学部へ赴任したが、その前の4年間勤務した愛媛大学農学部では、研究に必要な外国文献が手に入り難く苦労した。当時の地方大学はどこでも似たような情

況だったと思うが、外国の雑誌など個人はおろか研究室でも購入していなかったし、コピー機も普及していなかったので、大きい大学等からコピーを取り寄せることもできな

った。そこでどうしても読みたい文献があると、カメラと接写装置を携えて京都大学などへ出向き、雑誌の頁を一枚一枚撮影して、持ち帰ったフィルムを自分で現像して文献複写用の安い印画紙に焼きつけ、むさぼるように読んだものである。

弘大農学部に来てみると、園芸学教室では米国園芸学会誌をとっており、バックナンバーもかなり揃っているのには感激した。とはいえ一般に文献の入手が困難なことは同様であった。私はやがてリンゴの剪定の研究に取り組むことを決めたが、その時考えたことの一つに、「情報の入り難い地方において、最新の情報に頼るような研究をするのは不利である。10年くらい文献を見なくてもやって行けるような研究をしよう」ということであった。そこで剪定の研究の基礎として、リンゴ樹のすべての新梢の長さを全部測定して度数分布を調べるといふ、人のやらない研究に取りかかった。結局、約10年間は外界との関係の殆どないような状況で研究を続けた。途中で京都大学の恩師から「もっとまともな研究をやりなさい」と御忠告を受けたが、恩師から遠隔の地であることを幸いに、恩師にたてつくようなことはしないで自分の方針を貫くこと

が出来た。しかし最後に恩師から学位論文をまとめるように声をかけて頂き、その御厚情は今日でも身にしみて感じている。それにしても、学界の「中央」から離れた情報過疎地の環境が、一人よがりの面が強いとはいえ自分の考えどおりの研究を進めることを可能にしたのだと思い、弘大農学部で仕事が出来たことを本当に有難く思っている。

現在では全国どこにいても欲しい文献のコピーが手に入るし、そのうえインターネットだ、Eメールだと情報の洪水になっている。大学の研究者もそれを追うのに時間と精力をとられがちのようである。弘前大学のメリットは学界の「中央」から遠隔の地にあることであり、こういう土地でこそ自分の頭でじっくりと物を考えることが出来るのだと言いたいが、こんな考え方は益々受け入れられなくなってきていることであろう。

私は退官後、剪定に関する文献をまとめたかと思えばボツボツとりかかっているが、その対象となる文献には1950年代、60年代のものも少なからずある。かつての流行に乗ったような研究は取り上げる価値のないものが多く、最新情報に振りまわされる研究のはかなさを感じている。



定年退官後の雑感

奥瀬 一郎

本学を定年退官して最初の年末が近づいているが、心身の整理は未完のままで新年を迎えることになりそうである。

顧みると学生として4年、教官として38年の合計42年間にわたり、本学農学部とともに過ごしたことになる。筆者は昭和27年に文理

学部農学科へ1回生として入学した。当時は終戦後の混乱から脱出しつつあり、高度経済成長への転換期にあった。耐久生活はなおつづいており、学生生活も今日からみると想像できないほど粗末なものであった。しかしながら、人生観の異なる多くの学友と相互理解

を深め、貧しいながらも心豊かな学生生活をおくれたように思っている。

昭和30年に農学部が創設が認められた。記念パーティーは現在農学部ボイラー室になっているローンのところに屋台を10台集め、農学部・文理学部教官、事務官、学生の参加のもとにおこなわれた。般若湯の効果は著しく、日頃謹厳な文理学部の先生方が破顔一笑するなど、大いに盛り上がり、当時としてはまことにユニークなパーティーであった。

農学部創設後、わが国は高度経済成長政策を推進した結果、経済は著しく拡大し、わが国は世界の経済大国の仲間入りした。その結果、われわれの生活も未曾有の豊かさを謳歌した。しかしながら高度経済成長政策による問題点も顕在化し、資金過剰からいわゆるバ

ブル現象を生じ、そのことが公務、産業の財務に大きな混乱を招来し、それが海外にも波及したことはご承知のとおりである。また前述のような政策の推進による精神面への影響が懸念されるが、この点については話題にのぼることが少ないようである。

他方、産業面では工業振興に重点がおかれ、全産業にしめる農業の経済的なウエートは年々低下しつづけたのである。その結果が農業軽視、さらに農学部不要論を生じることになった。本学農学部は高度経済政策の推進初期に創設され、その推進とともに充実・発展し、その問題点が顕在化した時に新学部に移行したことになる。すなわち社会的背景があつたことである。新学部の今後について学外から思いをめぐらせているところである。



消えゆく技術の伝承と展開

長谷部 次 郎

農学部を退職して3ヶ月が経ちました。健康なうちに再度社会のお役に立つことを考えていますが、今のところは持ち帰った資料の整理やら、気ままな暮らしでの心身の充電やらに打ち過ぎています。「専門」に凝り固まった勤務から解放されて、全く自由な目で世間を眺めることができるのではないかと期待していたのですが、やはり、四十数年間関係してきた「専門」から関心が遠のくには、まだ時間がかかるようです。

その一つは、最近、頻りに世上に取り沙汰されている諫早干拓問題です。干拓工学は私の専門ではありませんが、在職中に授業担当していた農地工学に包括される一分野として講義していましたので、いささか気になるわ

けです。この問題の論点は、数十年前の計画が今の社会事情にそぐわなくなったこと、干潟の生態や周辺の環境の大きな変化への懸念などとされています。このような批判は行政の在り方に向けられているもので、工法技術の再検討を指摘しているわけではありませんが、干拓現場の技術者、設計関係者にしてみれば、やはり何となく落ち着かない気持ちだろうと、同じく技術に携わる者として同情を禁じ得ません。諫早干拓に同じ複式干拓で、約30年前に先駆けて完成した八郎潟干拓が、干拓先進地のオランダの技術を導入し、世紀の大事業として脚光を浴び、大規模近代農業の基を拓いたものとしてもはやされたのに比べると、まさに時代が変わったという強い感慨を覚え

ます。諫早に限らず羊角湾など他の干拓事業も問題になっているようですが、「八郎潟」の時代に相前後して完工していれば世間ほどのように評価したでしょうか。何はともあれ、技術に罪はなくとも、技術の利用意義が変化し、以前より評価が低くなると、技術そのものの存続にも少なからぬ影響があることは確かです。

このような技術の利用意義の変転は干拓ばかりではなく、かなり古くから農地開発全般に向けられており、開田はおろか開畑も全く制限されている状況下にあることはご承知のとおりです。干拓も含め農地開発のような大きなプロジェクトは、計画から完成までに長い時間を必要とするものであり、目標の評価が激しく変転する現代においては、息の長い仕事はやりにくくなっていく傾向があるように思います。実務として使われなければ、その技術の進展は止まるかまたは衰退の道をたどることになります。たとえ現在、国内の利用が皆無でも、世界的あるいは将来的には、反収の爆発的増大が期待されない限り、農地開発の必要性が減ることはありません。この期において、技術消滅に手をこまぬいていずに、何らかの形でこの技術を保存し、伝承を続ける方策を考えるのが技術者の責務と言えるでしょう。

価値の変転は用水事業にも見られます。全部の水路ではありませんが、用排水路のコンクリート三面張りほだめ、草生が石積みにし、自然石のごろごろした蛇行する川に戻すという、最近のドイツなどで見られる田園環境保護の思想を取り入れた試みが、諸処の農業用排水路の改修で計画されていると聞いています。田園リゾート、親水・ビオトープ空間の創出がその意義であるといわれます。水路計画は、経済的な土地面積の利用と工事費の節約から、最小断面にすべく粗度係数の小さい

資材でライニングし、最小経路の路線とするという昔教わった設計法概念からすれば180度の転換です。もちろん、すべての水路をこのように自然の状態に「復元」するわけではありませんから大きな問題とはなりません、それにしても少しひっかかるものがあります。

詳しく計画を見たわけではないので、的外れな疑問かもしれませんが、手本にしたドイツ例の平坦な河川と異なり、地形の複雑な、しかも流況の不安定な日本の河川または水路で、流量・流速を阻害する要素を増大させるのは、局所的にしろ水害を招くことにならないか。水環境生態保全のために自然に戻すのはよいが、わが国の高温多湿下で異常に繁茂する流域の雑草・雑木は誰が管理するのか。氷河期に植生種が減少し、かつ生物自然相が極相にあるヨーロッパのビオトープ観をそのまま日本に移入するのは妥当か。などと新しい展開の足を引っ張るような考え方をすることも歳を取ったせいかもしれません。

上記それぞれの例は、性格は異なりますが、いずれも技術の当初目的の否定もしくは評価の変更を迫られる例です。これが正しいのか間違っているのかは分かりません。一つの技術の結果が、ある場合では正義であるし、別の場合には悪となります。人の見方によっても価値の相違が現れます。状況はその時々で変わり、目標の変遷があるのは止むを得ませんが、苦勞した結果の全部が否定されるのは技術者としてつらいところです。環境工学技術に携わるものとして、世間に望みたいのは、多様な視点で技術を評価することへの要請です。このような技術に関しての数多くの同窓生がおられることと思いますが、これからはかなり厳しい時代に入って行くことが予想されます。どうぞ、今までの伝承を続けながら、これを基に新しい展開を図られることを期待します。

平成9-10年度同窓会総会報告

平成9-10年度総会が平成9年11月29日、14時より五所川原市駅前の「藤吉郎」で開催された。総会での主な審議・決定事項は以下の通りである。

1. 平成7-8年度事業報告 (原案通り、承認された。)

平成7年度		平成8年度	
平成7年6月17日	第2回40周年記念事業 実行委員会	平成8年6月17日	40周年補助費として46 万円寄贈
7月4日	母校援助費として20万 円寄贈	9月6日	母校援助費として20万 円寄贈
8月25日	岩手支部総会(川越、 塩崎教官出席)	9月27日	山形支部総会(斉藤寛 教官出席)
10月7日	平成7-8年度総会 (大学会館)	10月14日	会報17号発送
11月14日	福島支部総会(宮入教 官出席)	11月15日	関東支部総会(菊池学 部長、工藤明教官出席)
平成8年1月27日	岩手支部総会(角野教 官出席)	11月30日	福島支部総会(藤田、 長谷部教官出席)
1月30日	会報16号発送	12月25日	青森支部総会(工藤啓 一、斉藤寛教官出席)
3月22日	卒業・同窓会入会祝賀 会	平成9年2月3日	西北五支部総会(斉藤 寛教官出席)
		3月21日	卒業・同窓会入会祝賀会

2. 平成7-8年度決算 (原案通り、承認された。)

収 入

区分	項 目	予 算	決 算	達 成 率	摘 要
A	繰 越 金	1,910,846	1,910,846	100	利息(H7/4/1) 5,548含む
B	正 会 員	4,200,000	3,420,000	81	1,134* @3,000+3* @2,000
C	入 会 費	2,000,000	1,915,000	96	130* @10,000+31* @5,000 (内46人H9分)
D	広 告 料	250,000	270,000	108	16社
E	利 息	50,000	686	1	
	合 計	8,410,846	7,516,532	89	

支 出

区分	項 目	予 算	7 年 度	8 年 度	H7,8決算	達成率	摘 要
1	名簿発行費	2,500,000	71,351	103,898	175,249	7	(注1) H 9年度へ
2	会報印刷費	1,300,000	783,929	939,066	1,722,995	133	会報16、 17号発行
3	歓迎会費	800,000	411,665	346,432	758,097	95	
4	支部後援費	800,000	181,192	349,060	530,252	66	
5	母校援助費	400,000	200,000	200,000	400,000	100	
6	会 議 費	500,000	290,559	0	290,559	58	
7	庶務・管理費	200,000	13,822	0	13,822	7	
8	通信・印刷費	500,000	161,913	3,329	165,242	33	
9	慶 弔 費	50,000	5,500	30,340	35,840	72	
10	振替手数料	100,000	40,810	38,110	78,920	79	
11	40周年補助	0		464,039	464,039		(注2)
12	そ の 他	0	261,257		261,257		(注3)
13	予 備 費	1,260,846		2,620,260	2,620,260	208	(注4)
	合 計	8,410,846	2,421,998	5,094,534	7,516,532	89	

(注1) 名簿発行；平成9年度へ 費用 (175,249+1,435,381=1,610,630) 「達成率64%」

(注2) 40周年事業補助の一部(図書、パソコン購入費)を含む

(注3) 平成6年度分の振替分；前年度会計資料に掲載済み

(注4) 通帳(+現金)+振り込み=2,131,360+488,900=2,620,260
2,620,260-1,435,381(名簿印刷費借用)=1,184,879(実質繰越)

3. 弘前大学農学部同窓会の名称変更について

平成9年10月1日より農学部、理学部生物学科および教養部教官からなる新学部、「農学生命科学部」が開設されたことにより、同窓会の名称を学部名と一致させたいと提案され、承認された。新学部は平成10年度より学生を受け入れるのでその学生から会員とする。旧農学部卒業生は従来通り会員とするが、旧理学部生物学科の卒業生は会員としない。

4. 同窓会費の変更(値上げ)について

会費は昭和57年より2年間3,000円であった。この間、印刷、郵送料の値上がり等諸物価の値上がり、会員数の増加、しかしその伴う会費納入額が増加しないこと等の理由により会の財政状況はきわめて逼迫している。現状のままでは会の運営がたちいなくなると判断された。きわめて心苦しいことではあるが、会費を2年間で5,000円(前納)とする事が提案され、承認された。従来通り、会費納入者には会員名簿を送付する。

5. 農学部同窓会規約の改正

同窓会の名称が変更されたこと、会費が値上げされたこと、および特別会員、正会員が逝去した場合の弔意を従来の香典から弔電で表すことの理由で規約の改正が提案され、承認された。

弘前大学農学生命科学部同窓会規約

- 第1条 本会は弘前大学農学生命科学部同窓会と称し事務局を弘前大学農学生命科学部内に置く。
- 第2条 本会員は正会員、特別会員、準会員とし、学部卒業生ならびに大学院修了生を正会員、母校教官、前教官及び関係者を特別会員とし、学生を準会員とする。
- 第3条 本会は母校の発展に積極的に寄与し、会員相互の連絡、親睦を図ることを目的とする。
- 第4条 本会の目的達成のため下記の事業を行う。
1. 名簿の作成
 2. 支部の設置
 3. その他本会目的達成のため必要なる事項
- 第5条 本会に次の役員を置く。
1. 会 長 会員中より役員会で推薦し、総会で決定する。
 2. 副 会 長 ”
 3. 監 事 ”
 4. 支 部 長 支部総会で正会員より選出する。
 5. 評 議 員 総会に於て正会員中より30名以内を選出する。
 6. 幹 事 正会員中より若干名を会長が委嘱する。
- 第6条 役員の仕事は次の如く定める。
1. 会 長 本会を代表し、会務を統理する。
 2. 副 会 長 会長を補佐し、会長の代理をつとめる。
 3. 監 事 会計を監査する。
 4. 支 部 長 支部を代表し、支部の事務をつかさどる。
 5. 評 議 員 役員会を構成する。
 6. 幹 事 本会の会務を担当する。
- 第7条 役員の仕事
1. 会長、副会長、監事、評議員および幹事の任期は2年と定める。
 2. 支部長の任期は支部の決定による。
- 第8条 本会に名誉会長と顧問を置く。
1. 名誉会長 学部長を推戴する。
 2. 顧 問 会長および副会長の経験者を会長が委嘱する。
- 第9条 総 会
1. 通常総会 隔年毎とし期日は役員会に於て決定するものとする。
 2. 臨時総会 役員会に於て必要と認められた場合にこれを開く。
 3. 総会に於て次の事項を審議する。
イ 過去2年間の事業報告及び収支決算報告

ロ 今後2年間の事業計画

ハ 予算案の審議

ニ 規約改正

4. 総会の議事は出席会員の過半数をもってこれを決する。可否同数の場合は議長が決するところによる。

5. 議長は総会に於て出席会員中より選出する。

第10条 役員会

1. 役員会は会長、副会長、監事、支部長、評議員及び幹事をもって構成する。

2. 役員会は会長が招集し、本会の方針、会の改廃その他重要事項を審議し、これを総会に提案する。

第11条 本会の経費は会費及び寄附金をもってこれに充てる。

1. 会計年度は4月1日から翌々年3月31日までを単年度とする。

2. 会費 入会費 10,000円 (入学時納入)
正会員 1年度 (2年間) 5,000円 (2年分前納)

申し合せ事項

1. 特品会員、正会員が逝去した場合、弔電をもって弔意を表する。

2. 会員名簿は会費納入者へ配布する。

3. 学部中退者で希望者は正会員とする。

6. 平成9-10年度事業計画 (原案通り、承認された。)

○役員会の開催

○平成9-10年度総会

○同窓会名簿発行 (平成7-8年度版、平成9-10年度版)

○会報18、19号発行

○卒業・同窓会入会祝賀会

○母校援助費寄贈

○支部会への教官派遣

○その他必要と認められる事業

7. 平成9-10年度予算 (一部変更し、承認された。)

収 入

番号	項 目	7,8年予算	9,10年度予算	達成率	摘 要
A	繰 越 金	1,910,846	2,620,260	137	(実質: 1,184,879 62%)
B	正 会 員	4,200,000	6,250,000	149	1,250名 × @5,000
C	入 会 費	2,000,000	2,500,000	125	250名 × @10,000 (新入生[145+175] * 0.78)
D	広 告 料	250,000	200,000	80	
E	利 息	50,000	2,000	4	
	合 計	8,410,846	11,572,260	138	(実質: 10,136,879 達成率: 121%)

支 出

番号	項 目	7,8年予算	9,10年度予算	前年比	摘 要
1	名簿発行費	2,500,000	2,500,000	100	名簿発行：平成10年度
2	会報印刷費	1,300,000	1,500,000	115	会報18号、19号
3	歓迎会費	800,000	1,200,000	150	卒業式(祝賀会、写真、懇親会等)
4	支部後援費	800,000	1,000,000	125	FD等サービス、教官派遣旅費
5	母校援助費	400,000	600,000	150	環境整備費等
6	会 議 費	500,000	600,000	120	総会、役員会、出席旅費等
7	庶務・管理費	200,000	200,000	100	事務、アルバイト代
8	通信・印刷費	500,000	500,000	100	総会案内等
9	慶 弔 費	50,000	20,000	40	
10	振替手数料	100,000	100,000	100	
11	予 備 費	1,260,846	3,352,260	277	
	合 計	8,410,846	11,572,260	138	

8. 平成9-10年度役員選出

平成9-10年度の会長に油川孝男氏(昭和37年卒、農経、現在青森県農林部長)が推薦され、承認された。また、監事に工藤啓一氏(昭和38年卒、作物、弘前大学農学生命科学部)、評議員に神久志氏(昭和38年卒、畜産、青森県農林部)、千葉醇一郎氏(昭和45年卒、作物、青森県農林部)、そして情報幹事に戸羽隆宏氏(昭和50年卒、農利、弘前大学農学生命科学部)がそれぞれ推薦され、承認された。

平成9-10年度 農学生命科学部同窓会役員

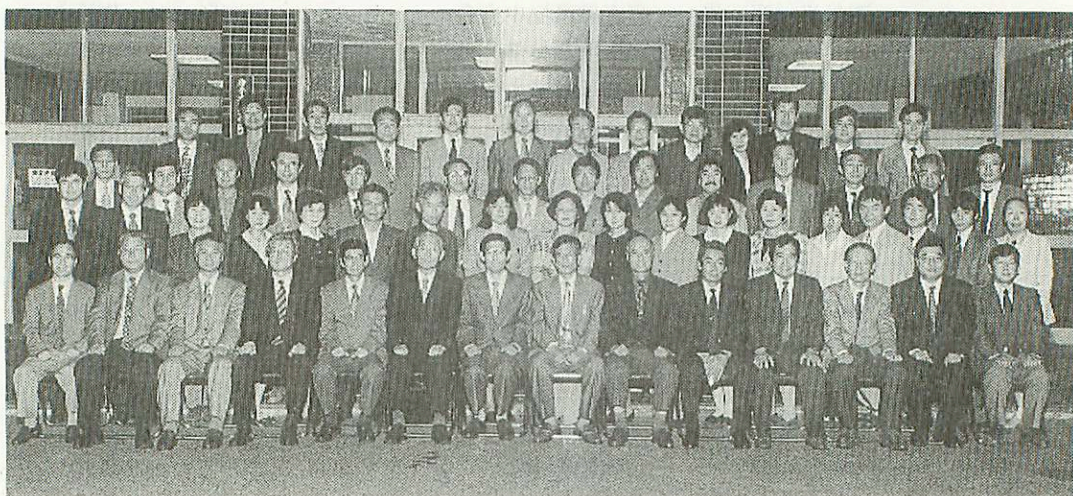
役職名	氏 名	勤 務 先	卒業年	教室名
名誉会長	豊 川 好 司	弘前大学農学生命科学部長	38	畜産
顧 問	横 山 宏	元農学部同窓会長	28	農製
	土 岐 政 雄	元農学部同窓会副会長	30	土肥
	岩 井 邦 彦	前農学部同窓会長	32	土肥
会 長	油 川 孝 男	青森県農林部長	37	農経
副 会 長	桜 庭 誠 蔵	弘前市役所農林部	36	畜産
	今 哲 広	青森県農業会議	42	農経
監 事	扇 田 実	むつ小川原地域産業振興財団	33	土肥
	○工 藤 啓 一	弘前大学農学生命科学部	38	作物

	西川明満	青森県農協中央会	45	作物
評議員	○神久志	青森県農林部	38	畜産
	三上巽	青森県営農大学校	42	農経
	○千葉醇一郎	青森県農政課	45	作物
	佐藤鉄雄	青森市役所農林部	45	育種
	及川博	青森県農業会議	47	農経
	奥村忠男	青森県経済連	42	農経
	大場真紀	芝管工(株)	38	農経
	泉完	弘前大学農学生命科学部	53	水利
	桜庭和範	弘前市役所農林部	48	作物
	蓮井裕二	東北女子短期大学	49	生化
	奈良岡馨	青森県工業試験場	56	農利
	蒔苗龍一	(株)東北建設コンサルタント	45	農利
	田中満	藤崎園芸高校	58	育種
	五十嵐啓真	(自営)五十嵐農場	48	農機
	木立正博	黒石市役所下水道課	46	造施
	岩谷齊	青森県りんご試験場	48	土肥
	木村利幸	青森県農業試験場	48	昆虫
	木村郁夫	(自営)キムラ園芸種苗	47	園芸
	神敏勝	柏木農業高校	43	育種
	工藤博喜	津軽尾上農協	54	果樹
	福士有一	弘前実業高校	48	育種
	久保惇	八戸市農業研修センター	34	畜産
	斉藤一志	五洋建設(株)	45	造施
	古館行雄	三本木農業高校	55	蔬花
	相馬敏光	(株)ササキコーポレーション	45	農機
	工藤保	むつ市役所農林部	48	土肥
総務幹事	斉藤寛	弘前大学農学生命科学部	42	土肥
情報幹事	○戸羽隆宏	"	50	農利
会計幹事	角野三好	"	45	水利

○印は新任

農学部さよならパーティー開催

平成9年10月1日に農学生命科学部が開設されるに先立ち、平成9年9月26日、農学部さよならパーティーが大会館内レストラン「スクーラム」で開催された。教官、事務官、同窓会関係者ら約60名が出席した。豊川学部長が農学部という名称がなくなり、農学生命科学部として新たに発展することとなったと、感慨を込めて挨拶した。その後、出席者は農学部についてそれぞれの思い出を語り合いながら、和気あいあいとした雰囲気の中にパーティーは終わった。



弘前大学「農学部さよならパーティー」記念 9.9.26

農学生命科学部創設記念式典 および祝賀会

平成9年10月6日に農学生命科学部、理工学部創設記念式典ならびに記念講演会が弘前市文化センターで約300名が出席し行われた。記念式典では吉田豊学長の式辞、町村信孝文部大臣や木村守男青森県知事からの祝辞披露や来賓祝辞、豊川好司農学生命科学部長によ



豊川好司農学生命科学部長による新学部の紹介（写真提供原田幸雄氏）



来賓による鏡割り（写真提供原田幸雄氏）

る新学部の紹介があった。記念講演は「21世紀における我が国と大学の役割」と題して阿部博之東北大学総長が行った。これに続き記念祝賀会がホテルニューキュッスルで約200人が参加し行われ、金澤隆弘前市長、徳田弘秋田大学長、手代木渉前学長などから祝辞があった後、参加者による祝宴が行われた。

農学生命科学部教官組織 (平成10年1月1日現在)

新学部創設に伴い組織が変わりましたので、御紹介致します。

農学生命科学部 ☎0172-36-2111(大代表)

学部長 教授 豊川 好司

生物機能科学科

生命理学講座

教授(旧教養) 高村 毅一 (3949)
 助教授(旧理) 松岡 教理 (3590)
 " (旧理) 片倉 正樹 (3591)
 講師(旧理) 河井 聖司 (3596)
 助手(旧理) 紺野 一碩 (3585)

遺伝情報科学講座

教授 新関 稔 (3776)
 " (旧理) 小原 良孝 (3589)
 助教授(旧理) 石田 幸子 (3587)
 " 原田 竹雄 (3777)
 " 石川 隆二 (3778)

植物エネルギー工学講座

教授 元村 佳恵 (3785)
 " (旧理) 澤田 信一 (3583)
 助教授 齊藤 寛 (3791)
 " 青山 正和 (3792)
 " (旧理) 葛西 身延 (3584)
 助手 木村 繁昭 (3787)

応用生命工学科

生体機能工学講座

教授 中村 信吾 (3788)
 " 武田 潔 (3775)
 助教授 五十嵐康雄 (3789)
 " 戸羽 隆宏 (3786)
 " 長田 恭一 (3790)

生体情報工学講座

教授 奥野 智旦 (3771)
 " (旧理) 武藤 昱 (3592)
 " 宮入 一夫 (3772)
 助教授(旧理) 姫野 俵太 (3592)
 助手(旧理) 元山 千里 (3592)

細胞工学講座

教授 浅田 芳宏 (3773)
 " (旧理) 杉山 一夫 (3586)
 助教授 大町 鉄雄 (3774)
 助手(旧理) 畠山 幸紀 (3588)

生物生産科学科

園芸学講座

助教授 加藤 弘道 (3857)
 " 嵯峨 紘一 (3811)
 " 浅田 武典 (3808)
 " 荒川 修 (3809)
 " 富田 正徳 (3812)
 助手 張 樹槐 (3859)

農業生産学講座

教授 卜藏 建治 (3821)
 " 豊川 好司 (3804)
 助教授 工藤 啓一 (3802)
 " 鈴木 裕之 (3805)
 " 杉山 修一 (3801)
 講師 福地 博 (3858)
 助手 松山 信彦 (3803)

環境生物学講座

教授	安藤 喜一 (3819)
"	原田 幸雄 (3816)
" (旧教養)	佐原 雄二 (3950)
助教授	城田 安幸 (3823)
"	佐野 輝男 (3817)
" (旧教養)	東 信行 (3824)
助手	藤田 隆 (3818)

教授	宇野 忠義 (3826)
"	神田 健策 (3828)
助教授(旧教養)	武田 共治 (3933)
"	澁谷 長生 (3830)
"	玉 真之介 (3829)

地域環境科学科

地域環境工学講座

助教授	萩原 守 (3846)
"	工藤 明 (3842)
"	泉 完 (3843)
"	佐々木長市 (3847)
講師	角野 三好 (3849)

農学生命科学部付属農場

農場長 教授 野村 忠弘

藤崎農場 ☎0172-75-3026・3027

教授	野村 忠弘
助教授	塩崎雄之輔

金木農場 ☎0173-53-2029

助教授	村山 成治
-----	-------

地域環境計画学講座

教授	戸次 英二 (3855)
" (旧教養)	牧田 肇 (3956)
"	谷口 建 (3848)
講師	高橋 照夫 (3856)

注) 氏名の前の(旧理)は理学部生物学科に所属していた教官、(旧教養)は旧教養部に所属していた教官を示します。

氏名の後の()内の4桁の数字は内線電話番号を示します。内線番号の前に0172-39-を付けると直通電話になります。

地域資源経営学講座

教授	高橋 秀直 (3827)
----	--------------

弘前大学創立50周年記念事業への拠金のお願い

すでにご支援をお願い申し上げておりました弘前大学創立50周年記念事業の募金期間も残すところ2ヶ月となりました(平成10年3月末日)。口数に関わらずご協力下さるようお願い申し上げます。なお、郵便振替番号は以下の通りです。

口座番号 02320-1-27415

加入者名 弘前大学創立50周年記念事業後援会

前農学部同窓会会長 中尾 良仁
(創立50周年記念事業後援会副会長)

支部だより

第18回弘前大学農学部福島会 『わんどの会』総会・懇親会に出席して

平成9年11月15日(土)18:00より第18回弘前大学農学部福島会『わんどの会』総会・懇親会が会津若松市東山温泉せあぶり荘に於いて開催され、農学部同窓会本部から私が派遣者の役を仰せつかった。このときの会の状況を報告します。工藤啓一教官が弘前大学創立50周年記念事業後援会から同会に派遣されたので、例年どおり農学部側から2名の出席となった。畠沢国美会長(S43卒、農工)の挨拶に始まり、来賓として私が農学部が本年10月1日から農学生命科学部に変わったことを中心に近況を述べた後、工藤教官が弘前大学創立50周年記念事業後援会の立場から同事業への募金に対しての協力をお願いする趣旨の挨拶があった。その後、総会に入り、事務局の幹事佐藤博志氏(S56、育種)、半澤勝拓

氏(H6、育種)提案の議題が和やかなうちに承認され、懇親会に移った。福島支部は毎年会合を活発に行っていると言うことであり、会員数は60名とそれほど多くはないにもかかわらず出席者は30名で我々と宮城支部の設立準備のために同会に出席した葛原信太郎氏(S41、農経)を加えて総勢33名となり、また温泉での一泊付きということもあって交流は深夜まで続く大変盛況であった。特に若い会員の参加者が多かったので、今後同会が益々発展することと期待される。2日間好天に恵まれ、翌日の午前中に晩秋の会津若松市の名所旧跡を案内していただき帰路についた。今回の福島行きのお機会を与えて頂いた弘前大学農学部同窓会に御礼申し上げます。

(平成9年11月17日 五十嵐康雄記)



教官人事

定年退官

- 菊池 卓郎 教授 (園芸農学講座)
平成9年3月31日
- 奥瀬 一郎 教授 (園芸農学講座)
平成9年3月31日
- 長谷部次郎 教授 (農業土木学講座)
平成9年3月31日

昇任

- 長田 恭一 助教授 (生物資源利用学講座)
平成9年5月1日
- 泉 完 助教授 (農業土木学講座)
平成9年5月1日
- 宮入 一夫 教授 (生物機能開発学講座)
平成9年7月1日

新任

- 東 信行 助教授 (環境生物学講座)
平成9年10月1日

訃報

現教官

農業土木学
講座教授
川越信清氏



ありし日の川越先生

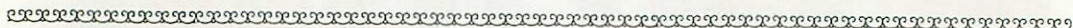
元教官

畜産学教授 伊藤豊治氏
畜産学教授 坪松戒三氏
昆虫学教授 福島正三氏

同窓生

桜庭平一郎氏 (農製昭32年卒)
坪井 篤氏 (農製昭32年卒)
黒沢 淳氏 (農経昭33年卒)
西田 嘉治氏 (土肥昭35年卒)
田附 良光氏 (作物昭37年卒)
瀬戸 隆一氏 (水利昭45年卒)
千葉 耕平氏 (造施昭47年卒)
種市 正夫氏 (果園昭48年卒)

上記の方々が御逝去なさいました。
慎んでご冥福をお祈り致します。



新任教官の自己紹介



東 信行 生物生産科学科 環境生物学講座 助教授

1962年北海道生まれ。弘前大学理学部卒業、東京大学大学院農学系研究科修士・博士課程修了後、1997年9月まで豊橋技術科学大学工学部建設工学系に勤務しておりました。現在は共通教育棟3Fの住人。北に生まれてから次第に南へ西へと移動し、次は亜熱帯あたりかと予想していたのですが、しばらくぶりに雪国へ帰ってきました。動物生態・行動が専門ですが、前任地では、環境評価、そして工学的手法からの生物の生息場改善の研究と実践を行ってきました。よくいうと「学際的」な履歴を生かし、担当分野である野生生物管理・保全を主軸に生物学・環境科学の教育・研究を進めたいと思います。これまで、日本各地の河川・海洋が主なフィールドでしたが、青森が有する豊かな陸域の自然環境とそこに棲む生物たちも相手に取り組んで行く予定です。よろしくおつきあいください。